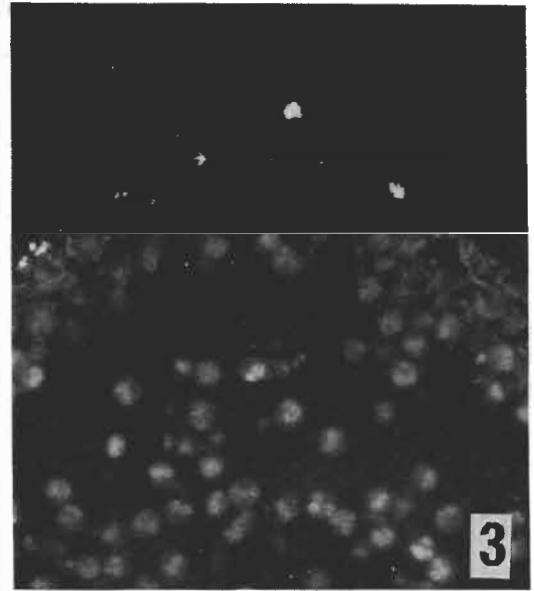
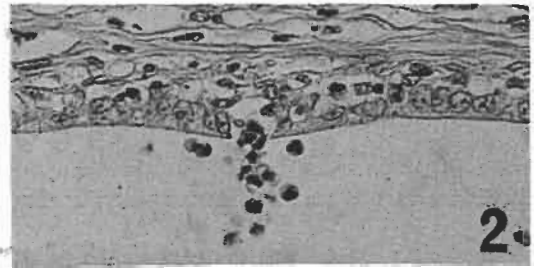
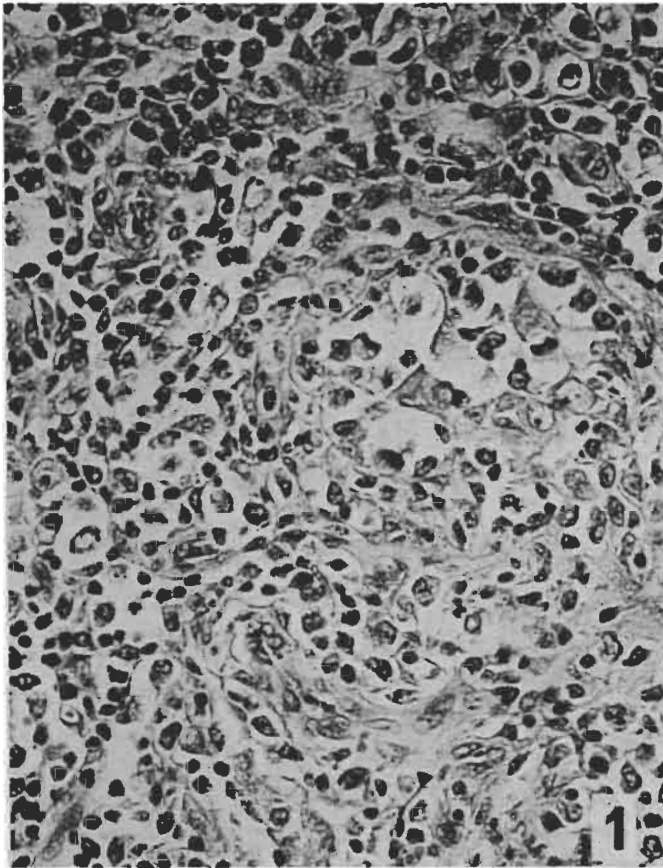


犬の精巣と精巣上体

山口大学農学部家畜病理学教室 出題 第32回獣医病理学研修会標本No.576



動物：犬，ダックスフント，雄，5歳，体重4.7kg。
臨床事項：後肢のふらつきで来院。椎間板ヘルニアの手術を受けた。その時右精巣の硬化に気付いて摘出した。なお血液検査及び尿検査で異常は認められず，ブルセラ菌 (*Brucella canis*) 凝集抗体は陰性であった。

肉眼所見：精巣上体はやや腫大（長径3.5cm×短径1cm）していた。精巣及び精巣上体は充実性で，弾力があり，表面・断面の色調は灰白色であった。

組織学的所見：精細管間質には，び慢性に密な単核細胞主体の浸潤がみられ，精細管の萎縮や周囲間質結合組織の軽度の増殖を伴っていた。これら間質の小静脈周囲性のマクロファージ，リンパ球及びプラズマ細胞浸潤は基底膜を越えて管腔内にもみられた。精細管内の造精系細胞は脱落し，明瞭な核小体を有する大型淡明核と明るく豊富な細胞質をもつ，セルトリ細胞により置換されていた（写真1，HE，×475）。一方精巣上体では，やや拡張した管腔内には好中球が集積し，上皮の基底膜部に好中球が接し上皮が破壊されている像（写真2，HE，×475）

や，さらに周囲間質や白膜部には，散在性の小膿瘍形成と浮腫を伴う強い結合組織の増殖がみられた。また好中球，マクロファージ，リンパ球及びプラズマ細胞の浸潤あるいは細小静脈炎及び周囲炎もみられた。

考察及び診断：精細管内にわずかに残存した変形した精子細胞には，犬IgGが結合し，また精巣上体管表面の特に線毛部には，犬IgGや微細顆粒状の補体第3成分の付着がみられた（写真3，矢印，蛍光抗体法，×710）。さらに血清中のIgGは正常犬の造精系細胞と精路系上皮表面及び，精子頭部とも結合した。提出例では，なんらかの原因による精巣構成細胞の破壊があり，宿主の免疫系が発動し，遷延感作類似の細胞反応の結果，造精系細胞の破壊が生じ，無精子症の状態に陥ったと考えられた。一方精巣上体では上皮表面に結合したIgGにより補体系が活性化され，好中球の誘導，上皮の傷害が生じたものと思われた。診断名は①リンパ球・プラズマ細胞性間質性精巣炎，②微小膿瘍形成を伴う慢性間質性精巣上体炎とした。